

親鸞の「往生論註」解釈とその展開についての一考察

村 上 泰 順

北魏浄土教の大成者、曇鸞が親鸞に与えた影響は多大なものである。親鸞の名が天親と曇鸞から付けられたこと、親鸞教義の主要な言葉である。他方、廻向、一心等が「往生論註」（以下「論註」と略す）にみられることによって曇鸞の影響力が想像できる。

明確な区別はできないが、親鸞は曇鸞教学を受容した面と同時に、自己の立場から「論註」を解釈したという面もある。ここに目を向けることによって、親鸞の「論註」解釈の一端をみると共に、「論註」註釈書の意味についても考察したい。

「教行信証」は第十八願を五願開示して、教、行、信、証、真仏、真土の六法とし、さらに化身土巻を加えて構成されている。親鸞は「論註」の一部を必要に応じて取り出して、「教行信証」の各巻に配当している。このことが、基本的には、親鸞の「論註」解釈を示すものである。したがって、「教行信証」における「論註」引用文の意図と意味を一

親鸞の「往生論註」解釈とその展開についての一考察（村上）

つ一つ調べて全体的な傾向を考へるべきではあるが本論では親鸞の解釈の仕方がよくわかると考へられる不虛作住持徳（以下不虛作功徳と略す）について論じる。

「論註」は上下二巻にわたって三嚴二十九種の浄土を詳解し、上巻に於ては国土の体性につき、下巻に於てはその力用について述べる。本論で取扱うのは下巻の仏莊嚴功徳の第八番目の不虛作功徳である。

何者莊嚴不虛作住持功徳成就、偈言觀仏本願力遇无空過者能令速満足功徳大徳海^ニ故。〔不虛作住持功徳成就〕者、蓋是阿彌陀如来本願力也。〔今当略示不虛作之相不^レ能住持、用願^ニ彼不虛作住持之義。〕（中略）所^レ言不虛作住持者、依^ニ本法藏菩薩四十八願、今日阿彌陀如来自在神力^ニ願以成^レ力、力以就^レ願。願不^ニ徒然^一、力不^ニ虛説^一、力願相符^ニ畢竟不^レ差 故曰^ニ成就^一。

親鸞は不虛作功徳の文を行巻一乗海釈と真仏土巻に引用している。（中略）とした所は行巻で、「」で示した所は真仏土巻で、それぞれ中略されている。）

行巻では海について

言レ海者、從ニ久遠ニ已ラ来、転ニ凡聖所修、雜修雜善、川水ニ、転ニ逆誘闡
提恒沙無明海水ニ、成ニ本願大悲智慧眞実恒沙万徳、大宝海水、喻ニ之
如レ海也。

と御自釈して、その引証として五文あげる。その第二で、転成一味を証する為の引文である。この引用の力点は、転成一味を意味する「能く速に功徳の大宝海を満足せしむ」にある。転成せしめるのが阿弥陀如来の本願力であるから、「浄土論」からではなく、「論註」を引用したと考えられる。

真仏土巻では真仏土の引証として「論註」から六文をとり、その最後に引用される。この引意は、身土不二で互いに相通じるが、前五文は国土の功徳について、不虛作功徳の文は真仏を証す為のものである。

真仏土巻の初めに、
仏者則レ是不可思議光如来、

とある。不可思議光如来が十方衆生を利益する用き、即ち、悪業煩惱の衆生を撰取不捨する用きの根源を示したものがこの不虛作功徳である。したがって、ここに於ては、本願力の用きの不虛作性を述べた「所言不虛作住持者」以下の引用の力点がある。また、行巻についても同様であるが、ここでの法蔵菩薩の四十八願、阿弥陀如来の自在神力は、結局、第十八願の力用であると言える。

このように、同じ不虛作功徳の文でありながら、場所によって、親鸞の引用の意図が少しづつ異なる。では、「論註」において不虛作功徳はどのような位置にあるのか。先ず一般的な理解を紹介したい。

「浄土論」の偈頌で、觀の字が付く所が二ヶ所ある。一つは清浄功徳の「觀彼世界相 勝過三界道」であり、今一つは不虛作功徳の「觀仏本願力」である。前者は浄土の総相であり、後者は三嚴二十九種の所帰であり至要である。所帰、至要の理由として、

主有ニ何増上。是故次觀ニ莊嚴不虛作住持一

という言葉があること、及び、浄入願心章に

此三種成就、願心 莊嚴

とあり、偈頌中で本願力という言葉は不虛作功徳にしかないことがあげられる。

本願力とは、広は「本法蔵菩薩四十八願」とあるように四十八願全体をさす。中は利行満足章での取三願される十八、十一、二十二願である。略は第十八願である、というのは、偈頌「遇無空過者」の遇に理由がある。「論註」上に虚作の相、即ち、遇って空しく過ぐる例として次の文をあげる。

見ニ有如来ニ但ニ声聞、為僧、无ニ求仏道者、或有ニ値、仏而
不ニ勉ニ三途ニ。善星・提婆達多・居迦離等是也。又聞ニ仏名号
發ニ无上道心、遇ニ惡因縁ニ退入ニ声聞・辟支仏地ニ者、有ニ如是等

空過者退没者。

遇について三例が見出せる。初めの如来と次の値仏は見仏に、終りの聞名号は聞名に約される。この二義の内、聞名は第十八願であるからである。

不虛作功德が三嚴二十九種の所帰であることの理由として三つ挙げられた。その一々を検討したい。

第一は、三嚴二十九種を述べた「浄土論」の偈頌は全て、五念門でいえば觀察門である、だから、觀の字を付した二ヶ所に浄土の莊嚴は収まるという意味であろう。しかし、もし真に収まるならば、ただ觀を付すだけではなく別の言い方で不虛作功德の重要性を示すのではないか、例えば、清淨功德が他の二十八種の別相に対して總相と表現したように。また、觀の字があるというだけなら地功德の偈頌一宮殿諸樓閣觀十方無導（下略）にも付いている。

第二は、増上とあるから三嚴の所帰だという意味であろう。仏八種の莊嚴功德を順に觀じるに際して、主が阿弥陀如来であることを觀じた次に、阿弥陀如来の用きの何が勝れているのか（増上なのか）を觀じることが、なぜ三嚴の所帰を意味するのか。

第三については、三嚴が願心をして莊嚴されたことに相違はない。しかし、曇鸞の理解では、

（心）知下此三種莊嚴成就由三本四十八願等清淨願心之所莊嚴

親鸞の「往生論註」解釈とその展開についての一考察（村上）

因淨 故果淨 非 无 因他因有上也。

とある如く、願心莊嚴故に因果共に清淨であることに力点がおかれている。この点からすると、不虛作功德よりむしろ清淨功德の意義が強調されているようにもとれる。また、不虛作功德は、阿弥陀如来の本願力を觀ずるに空しく過ぎる者はないという、浄土における仏の用きの不虛作功德を述べたもので、全体としての浄土は問題にされていない。

次に、不虛作功德の本願力が、広は四十八願、中は第十八、第十一、第二十二の三願、略は第十八願になることについて考えたい。

広の四十八願は不虛作功德の積中に「法藏菩薩四十八願」と述べられているので問題は無い。

中の三願は利行満足章にみられる。何が原因で速得菩提がなされるのかという問いに対して、阿弥陀如来の本願力に縁るとして、往生、正定聚、一生補処と菩提に至る過程の順に三願をあげて答としている。不虛作功德は浄土での仏の用きを内容としているから三願に収まらない。もし不虛作功德を淨穢二土に渡る本願の用きと解せば三願にまとまるが、後述する理由で、過解積になるだろう。

略の第十八願という見解はうなずけない。なぜなら、「論註」に於ては先の取三願で明らかかなように、第十八願は往生の願であって成仏までも誓った願ではないからである。

では、「論註」に於ける不虛作功德とはいかなるものか。
 彼^{（註）}觀察有三種。何等三種。一者觀察後^{（註）}仏国土莊嚴功德、二者

觀^{（註）}阿彌陀仏莊嚴功德、三者觀^{（註）}彼諸菩薩莊嚴功德。

とあるように不虛作功德は、基本的には觀察対象の一つである。何を觀察するのかわげれば、浄土における阿彌陀如来の用きが虚妄の起作でないことである。

三嚴二十九種は觀察対象であると共に、浄土の相である。したがって、不虛作功德は浄土に於ける本願力の不虛作なることを示している。

本願とは法藏菩薩の四十八願である。四十八願には衆生往生を誓った第十八願が含まれるので、浄土ばかりでなく穢土に於ける本願力の用きまで不虛作功德に見出せないことはない。しかし、本論では引用していないが、不虛作功德の後半部に、未清浄心の菩薩が浄土で見仏して上地の菩薩と等しくなる、とある如く、浄土での記述しか見出せないことを考えると、不虛作功德の釈に此土での本願力の用きを見るのは解釈のしすぎであろう。ただし、第十八願が虚作だという意味ではない。不虛作功德は第十八願の不虛作を示す場ではないということである。

不虛作功德は浄土に於ける本願力の用きが虚妄でないことを意味する。しかし、前半だけを独立させて解釈すると、浄

土の仏功德という面を離れて、二土に渡る阿彌陀如来の本願力の用きそのものの不虛作性を示したものと理解される。この場合、往生する方の立場から見れば、本願力とは第十八願力である。

親鸞は自己の第十八願觀の立場に立ちまわることによって、不虛作功德の中に転成一味をもたらすもの、撰取不捨の用きを見出して行巻、真仏土巻に引用したと考えられる。

ところが、後世の「論註」註釈者は親鸞の「論註」解釈を適宜取り込んで註釈し、理論付けたので、註釈書は親鸞教義の予備知識なしには理解し難いものとなった。これらの註釈書によって、親鸞教義も曇鸞教学もかえってわかりにくくなったように思われる。このことが明瞭に現われるのが不虛作功德の釈であると考える。

- | | | |
|----|----------------------------|------------------|
| 1 | 神子上 | 惠竜「往生論註解説」五七頁参照。 |
| 2 | 真聖全 I—三三一頁 | 3 真聖全 II—三九頁 |
| 4 | 真聖全 II—二〇頁 | |
| 5 | 「教行信証敬信記」（真全三一）三七四頁参照。 | |
| 6 | 「往生論註講義」（真叢別）二〇七頁、二〇八頁等参照。 | |
| 7 | 真聖全 I—三三四頁 | 8 真聖全 I—三三六頁 |
| 9 | 真聖全 I—三〇四頁 | 10 真聖全 I—三二二頁 |
| 11 | 真聖全 I—三三六頁 | 12 真聖全 I—三一六頁 |

（龍谷大学大学院）